

## 偉大なる業績を残した天文家

### シャルル・メシエの生涯

村上 忠 敬

吾々が極く普通の星雲を呼ぶときに使ひなれてゐる「メシエ」の名は、十八世紀の有名な天文家に因んでゐることは周知のことであらう。このフランスの天文家は今から丁度200年前の

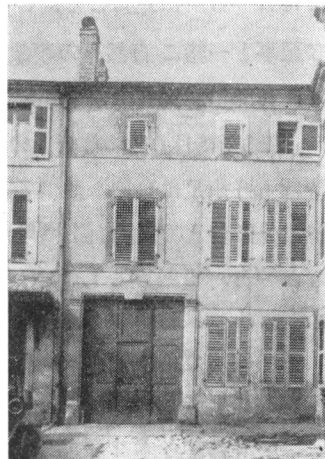


シャルル・メシエ

1730年に生れたのである。今その200年の昔を再び顧みて、貧しい一人の素人天文家が如何に偉大な業績を成したかを知ることしよう。

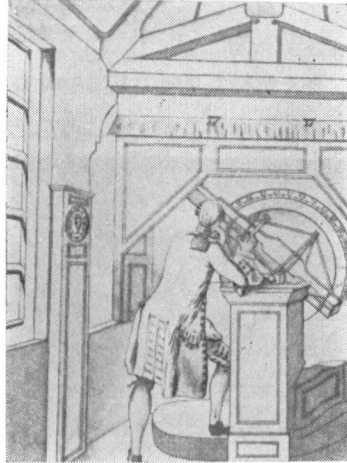
彼は即ち1730年6月26日に、フランスの片田舎バドンビレに、その村長の子として生れた。彼の誕生した記念の家は革命や歐洲大戰の兵火にも堪えて、今尚ほ存してゐる。彼は小學校の教育すらも受けてゐないが性來緻密な人であつた。

村長ローレイヌの子として生れたシャルル・メシエがどうして天文學者になつたのだらうか、それは、1744年に現はれた六つの尾を持つた彗星と、1748年の日蝕と、此の二つの天文現象に刺戟されたためであると云はれてゐる、然しメシエの遺稿や日誌をたどつてみると彼が天文學者になつたのは全く奇縁で、寧ろ偶然である。彼は生涯素人天文家として過した。一體偶然とか奇縁とは何であらうか？彼の生涯をたどつてみたら明かにされるであらう。



メシエの生家

11歳のとき孤兒にされた彼は書記として兄の所に世話になりながら、1751年まで法律を學んだ。所がそのとき親類の友人がパリで二つの地位をさがしてくれた。即ち、検事を見習ふか、天文家の所に行くか、であつた。彼は後者を選んでクルニー寺院附天文台のドリル(Delisle)のもとに行くことにした。彼がルイ十五世當時の、謂はゞ全世界の幸福と災厄とを反映してゐる華麗なパリーの都に初めて行つて、家が澤山ならば、車馬が繁く通ひ、色んな種類の人々が群集してゐるのをみて、どんなに驚いたかは、その時から書き初めた彼の日記に詳しく記されてゐる。その年の10月に王立理科大学の先生であるドリルの所に落ち着いた。メシエは却々の勤勉家で



觀測中のメシエ(自畫像)

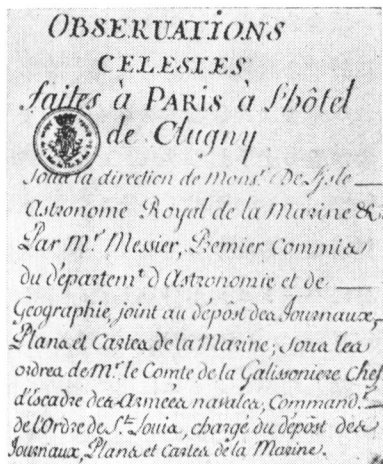
天界や地上の自然現象の外當時のパリーで見聞したことは何でも記載してゐる。パリーの市中の色んな種類の建物の數から、一年中にほふられる豚の數まで調べてあるところは、さすがに初め法律を學んだだけある。そして毎日一日中に見たこと聞いたことすべてを日記帳に記して行つた。こんな記事と一緒に自然界の現象についての觀察をごた混ぜにして書いてゐる。1753年5月6日の水星經過の記事は次の様を書いてある。

「1753年5月6日は日面上の水星經過をみるために三時に起きた。日出の時はもう水星は日面を通つてゐた。初虧はパリーではみえない。水星は10時21分25秒まで太陽面上に居た。天氣は快晴で雲もその外の邪魔物も何もなかつた。北風が少し吹いたため器械がゆるいだ。觀た場所はクルニー(Clugny)天文台内のドリル氏宅である。」

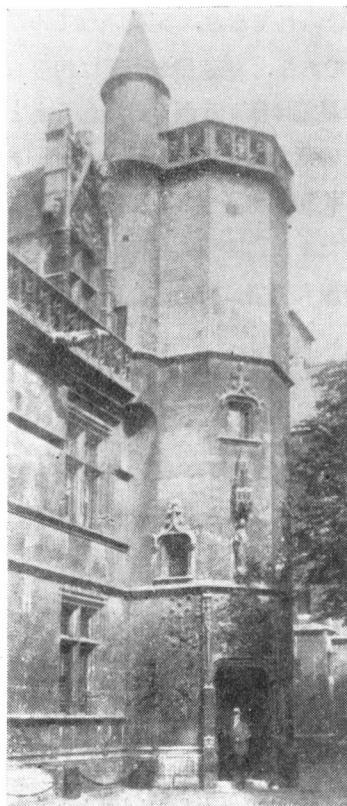
その後ろに彼はドリルの觀測をもととした水星經過の圖や他の天文台での觀測狀況などを記載してゐる。

彼がそれから五十年間觀測したクルニーの塔は歴史的に由緒の深い所で、ソルボンヌ大學(Sorbonne)の間近である。(天界第57號第388頁參照)

彼はそのクルニ1の塔の上で目を空に向け又地に向けて世の中のすべてのことに注意した。流星・地震・磁氣嵐などには特に注意した。1755年11月2日に彼の室に在つた數個の磁石が變にゆらいで、全く彼が途方に暮れた程の激しい磁氣嵐を實見したことを友人に書き送つてゐる。その日は天候も暴れてゐたが、かの有名ナリスボンの大地震の翌朝のことであつた。尙1755年は



メシエの自筆観測帳の一部



クルニ1の天文臺

太陽黒點の極小の年である。

彼が如何に地上の事にも興味を持つて居たかは、1758年のルイ十五世を弑せんとした犯人ダミアンの處刑の記事の細かさや熱心さをみるとわかる。パリの人々はまるで今日甲子園の球場に押し掛け野球ファンの様に、お話しにならぬ熱狂振りで見に出掛けたのであるが、彼自身も亦最も熱心な一人であつたのだ。

1758年に彼は初めて彗星を發見した。人々はその頃ハレー彗星の歸來を待ち詫びてゐた。推算では1757年に來る筈だつたのだが、少し遅れて1759年1月21日に、初めてメシエがクルニ1の塔の上からそれをみつけた。(歸來が遅れたのは木星の攝動によつたことを Clairaut, Laplace, Lalande 等が證明した。)メシエの師ドリ

ルは自分の弟子に對する嫉妬からこの事を發表しなかつた。數ヶ月後獨乙に於ける發見が報ぜられてから漸く彼の觀測を公表することを許した。それ以來彼は比ひなき成功を以つて彗星を探究した。彼は彗星をさがし出すのが餘り上手だつたので、時の國王ルイ十五世から「彗星のいたち」(le furet des comètes) と云ふ渾名を戴いた。彼は自ら新しい20個の彗星の發見者であるばかりでなく、他の人の發見した彗星も追究した。1781年3月13日にハーシェルが發見した「彗星の新種」(初めは彗星と思つてゐた。即天王星)をフランスで初めて觀たのも彼である。

然しながらメシエに最も名譽を負はすものは、彼が自ら彗星を探するときの不便を除くために作製した星雲目録である。周知の如く彼が附けた星雲番號は今尙最も簡単な命名として廣く用ひられてゐる。記載されてゐる103個の中68個は彼の新發見にかかるものである。望遠鏡が天體に用ひられるようになって以來彼以前に發見された星雲は僅か5個であつたことと比べたら、彼の仕事の偉大さがわかる。この偉大なる發見を僅か6センチ口径の貧弱な望遠鏡でなしたことを知ると寧ろ彼の「いたち」の様な鋭眼には驚くの外はない。彼はそれらの星雲を觀たままに記載し説明したに過ぎない。彼自身の記事の例としてアンドロメダ座大星雲M31と、その傍らにあるM32の所を抜いてみよう。

**M. 31** アンドロメダの帶の所に在り。美しき星雲で紡錘狀をなす。初めてみたのは1752年なり。種々の望遠鏡を以て檢したるが、中に星を認めず、形は二個のピラミッドを底を合してくつ附けたる様にて、軸は西北から東南に向き、長さ40′、幅15′なり。これらの測定は絹絲測微計を附したるニュートン式望遠鏡を以てなせり。1764年8月3日。

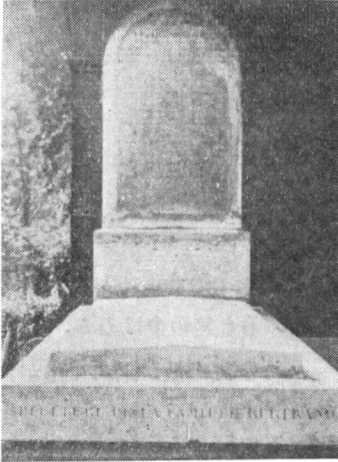
(この次にその後15年間何等の變化を認めなき由附記してゐる。)

**M. 32** 中に星を含まざる小さき星雲。アンドロメダ大星雲の數分距つた所に在り。圓形、初めて見たるは1757年、直徑2′。1764年8月3日。

フランス革命の當時も彼はクルニーで觀測をしてゐた。素々貧乏な彼はそのため益々貧乏になつて天文台の家賃さへ拂えず、困り抜いたが、矢張り仕事を續けた。そのうち油を買ふ金もなく蠟燭代さへなくなつて、夜の

仕事にさへ差し支へた、それでも屈せず観測した。近くで大砲の音がひびいた。それでも観測した。首切台の音が夜風にきこえて来た。それでも矢張り観測した。そして恐怖時代の最中にも彼は彗星を発見した!

この様にして彼は半世紀を通して、天文台の塔の上から星空の見張番をして、そこに起るどんな現象もみのがさなかつた。この時代にメシエ程熱



パリ市東郊ペールラシェーズの墓地にあるメシエの墓

心に観測した人はない。實に彼の様な人は人類の名譽である。ラランドは彼の爲に星座を命名した(セフェ、カシオペア、きりんに包まれた部分。しかし一般に用ひられなかつた)。又、月の面の上の一小噴火山にもその名を止めてゐる。

メシエは1817年に歐洲のあらゆるアカデミの會員又學會の會員として、97歳の高齡を以て歿した。而してペール・ラシェーズの墓地に葬られた。ナポレオン大帝は後彼にレジオン・ド・ノールの勳章を贈つた。彼の墓地はこんもりとした美しい

森の中で、草木が茂り、鳥の歌が聞えてゐる。そこに行くと唯云ひ知れぬ平和の感に満されるのである。(天界第56號第339頁参照)

メシエ生れて200年、吾等も亦共に熱心なりし天文家メシエの生涯を顧み賞讃と感謝を禁じ得ない。

(註) 本文は主としてフランマリオン夫人の記事に基いて書いた。

Furet とは白鼯のことで、兎を探ることが上手である。轉じて物好きな探索家の意味に用ひられる。

彗星騒ぎで野詩一首を試みました。どうぞ御批正下さい。(香鳩)

彗星有飛報。欲極奈終何。黃道輝辰少。碧穹珍客多。  
夜風拂愁陣。燈火喚詩魔。堪惜去來速。忽忽如夢過。